

認知症高齢者の生活に寄り添う介護従事者の ゴール構造に基づくケアスキル可視化

青木渉^{†1} 福田幸大^{†1} 宮坂光太郎^{†1}
田中とも江^{†2} 加藤貴徳^{†2} 船橋美沙子^{†2} 石川翔吾^{†3} 桐山伸也^{†3}

概要：認知症ケアの現場において、高齢者の個性に合わせたケアが重要であることが近年分かってきた。筆者らは入所者一人ひとりの生活環境を重視した認知症ケア施設と協業し、質の高いケアのエビデンスを創る取り組みを進めている。蓄積したケア映像事例から本質的な特徴を取り出し、ケアスキルを可視化する知識構造を設計し、介護従事者の気づきを促す学習環境を設計した。介護従事者のケアに対する考えを収集し、ケアゴールに着目した知識構造に基づく特徴抽出とその可視化が、スキルの異なる各者に適応した学びを促進できる見通しを得た。

キーワード：認知症情報学，コミュニケーション，ゴール表現，エビデンスベースケア

Care skill visualization based on the goal structure of care workers supporting the lives of elderly people with dementia

WATARU AOKI^{†1} YUKIHIRO FUKUDA^{†1} KOTARO MIYASAKA^{†1}
TOMOE TANAKA^{†2} TAKANORI KATOU^{†2} MISAKO FUNABASHI^{†2}
SHOGO ISHIKAWA^{†3} SHINYA KIRIYAMA^{†3}

Abstract: Recently it has become clear that care that matches the individuality of the elderly is important at the site of dementia care. We collaborate with the dementia care facility that provides care emphasizing the living environment of each resident, for aiming to create the evidence of high quality care. We have designed a learning environment that extracts essential features from accumulated care video cases, designs a knowledge structure to visualize care skills, and encourages care workers' awareness for "good care". We have gathered comments of care workers for video cases, extracted and visualized features from them using knowledge structure focusing on care goals. The experimental results have got a prospect to promote learning which adapting to each person with different skill.

Keywords: dementia informatics, communication, goal expression, evidence based care

1. はじめに

近年、高齢化が進み認知症を発症する高齢者が増加している。認知症は一旦正常に発達した知的能力が持続的に低下し、複数の認知障害があるために日常生活に支障をきたすようになった状態である。物忘れや理解度の低下といった中核症状に対して、認知症の方の性格や人間関係も含めた周りの環境によって、徘徊、不安などの周辺症状が現れる。認知症のメカニズムに関する図を図1に示す。このような認知症の方との関わり方が現在社会で大きな課題となっており、認知症ケアや看護学に関する取り組みとして、在宅ケアの評価や介護支援システムの研究が行われている[1][2][3]。また、医療・看護現場におけるスキルやノウハウを表出する研究も広く行われてきた[4]。

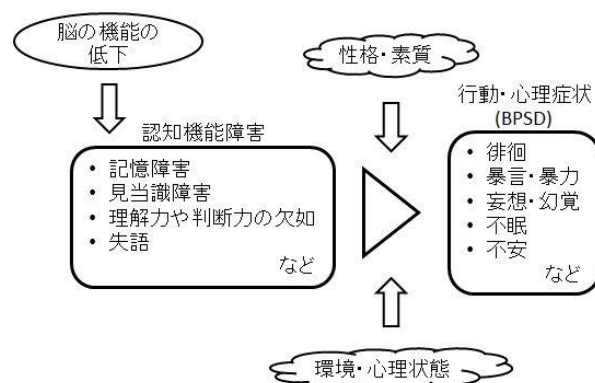


図1：認知症のメカニズム

高齢者は、身体的にも心的にも個性が多様であり必要な働きかけが異なる。また認知症の周辺症状には、その人の性格や背景環境が影響しており、認知症の高齢者一人ひとりに合わせたケアが必要となっている。

そのような認知症ケアの現場では、個性や環境を考慮したケアを行うため、全ての人や全ての時間に対して必ずしも定まった方法があるわけではない。またスキルやノウハ

^{†1} 静岡大学大学院総合科学技術研究科
Graduate School of Integrated Science and Technology, Shizuoka University
^{†2} ケアホーム西大井こうほうえん
Care Home Nishiooi Kouhouen
^{†3} 静岡大学学術院情報学領域
College of Informatics, Academic Institute, Shizuoka University

ウの引き継ぎが口伝いや経験によるものが多く客観的指標が少ない。特にケアに対する考え方や意識の仕方などは主観的になってしまい、伝承が難しくなっている。

本稿では、個性に基づいたケアにおける介護従事者のケアに対する考えた方を分析した結果について述べる。

2. 「その人らしい暮らし」を支える認知症ケア現場

2.1 ケアホーム西大井こうほうえん

本研究を進めていくにあたり、筆者らは東京都品川区の「ケアホーム西大井こうほうえん」の協力の下、認知症ケア事例の撮影とケアに関する様々なデータの取得を行っている。この施設では、認知症の方が個人として尊重され、その人らしい暮らしを実現することを目指している。ケアスタッフ一人ひとりが利用者の望む暮らしを実現できるよう住空間デザインを工夫したケアが行われている。例として高齢者が望む場所でケアを行うことや、コミュニケーションの場を増やし、他の利用者との交流を楽しんでいただくことなどが挙げられる。

2.2 高齢者の個性に基づくケア

「こうほうえん」では、施設を利用する高齢者一人ひとりについて、生活支援計画書や介護記録を元に、その人の個性に合わせたケアを提供している。個性に合わせたケアを行うため、介護初級者は上級者に比べ、ケアに対する考え方や視野が狭い傾向がある。そのため上級者と初級者はお互いのケアの違いを理解し、知識を共有することが必要である。

ケアのスキル・ノウハウ共有を目指して、個性に基づいたケアスタッフと施設利用者のインタラクションを分析し、ケアスキルの表出や蓄積、共有を進めていく。

3. 介護現場におけるスキル・ノウハウ共有

3.1 マルチモーダルセンシングに基づく認知症ケア知識の蓄積

「こうほうえん」でのケアスキルの表出や蓄積、共有に向けて筆者らは、実際に「こうほうえん」でケア映像を中心とした様々なデータの蓄積を行ってきた。蓄積したデータを分析し、その結果をケアスタッフ達と議論することで、ケアに対する行動の意味づけを行い、知を表出する過程を繰り返してきた。実際の研究サイクルを図 2 に示す。

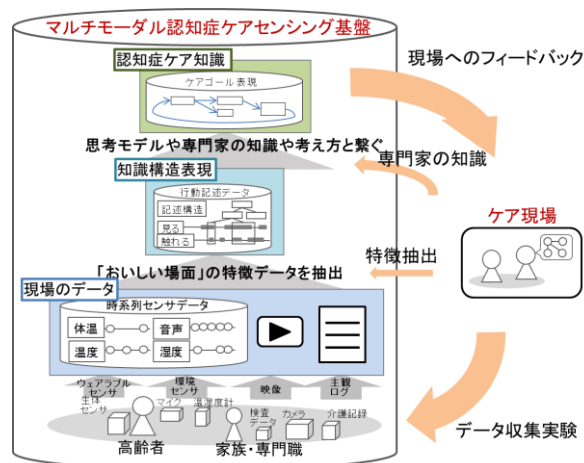


図 2：研究サイクル

3.2 ケアゴールを用いたケアスタッフの目標設定の表現

ケアスタッフのケアの意図は、高齢者の個性や状況に応じて多様に変化する。そのためケアの考え方を表現するには、ケアスタッフの個性への対応の意図を意識して収集し表現を行っていく必要がある。

ケアスタッフの個性への対応の意図を表現することで、主観的で伝わりづらかった個性に対応したケアが客観化される。更にその知識を可視化することで、ケアの意図の表出や共有に繋がる。

筆者らは、ケアスタッフの行動とその意図をゴールと具体的なサブゴールにプランニングして表現するゴールネットワーク[6][7]の構造に基づいて、ケアインタラクションの分析を行ってきた。施設利用者の望まれる生活をゴールとして考えた時、そこから更に細分化された目標をサブゴールとして表現する。図 3 に実際に行われた不安を解消するケアに対するゴールの記述例を示す。

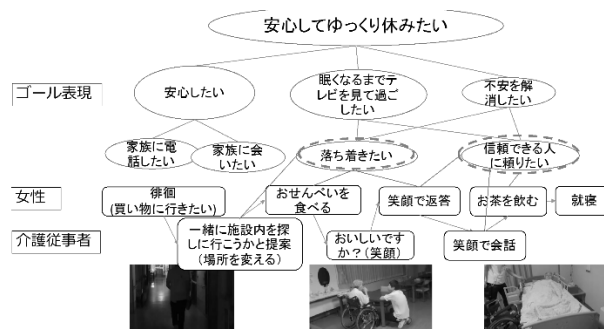


図 3：不安を解消する働きかけのゴール分析

この事例は、施設利用者が夜間に買い物へ行きたくなり、廊下で徘徊をしていた場面である。この施設利用者は普段から不安になりやすく、生活支援書において、深夜帯では安心してゆっくり休みたいという生活を望んでいる。このようなトップゴールに対して、スタッフは廊下から生活共同室という広い場所へ移動し、そこでお茶やお菓子を食べながらゆっくりと会話を行うことで、サブゴールとなる「落

ち着きたい」「信頼できる人に頼りたい」を満たし、安心をしていただき、就寝してもらえた。

このようにゴールに基づいたケアの問題解決プロセスの表現を行うことで、施設利用者の状態に応じた柔軟なケアの意図を表出することが可能である。またゴールを設定することで、扱う情報の種類と構造を決められ、現状との差分が記述できるようになり、複数のゴールを設定しアプローチを絞り込むことで、ケアプランを立てることができるようになる。

4. 施設利用者の個性に基づいた生活場面の状況理解

4.1 施設利用者の個性とケアスタッフの意図に着目したケーススタディ

ケアスタッフごとのケアにおける思考プロセスの表出化のためにケアにおける思考プロセスを収集するケーススタディを実施した。ケーススタディは、「こうほうえん」にて月に一度行われている研修会の場を借りて開催した。「こうほうえん」では、ケアスタッフを介護の経験年数や、講演会発表、研修等から上級者、中級者、初級者と分けて研修会を実施している。それぞれの研修会にてケーススタディを実施し、計3回実施した。

手続き

- 参加者のケアに対する日頃の問題意識などを収集する。施設にて従来行われてきた研修会の流れに沿って、普段のケアの悩みを聞く。ケアの悩みは今後のケア事例選定の参考に用いる。
- 事例映像を視聴してもらい、ケアの意図について今回設計したシートへ記入してもらう。なお同時に生活支援計画書も用意し、パーソナル情報を含め基本的な情報について参考にいただき、各介護従事者らがケアを行う上で特筆すべき事項について記入してもらう。
- ケアの意図についてコメント及び参加した介護従事者間で意見を共有してもらう。
- 事後アンケートを実施し、ケーススタディによる学びが得られたかどうか学習効果の測定のための情報を収集する。

被験者

「こうほうえん」に勤務するケアスタッフ12名(上級者:3 中級者:6, 初級者:3)

事例概要

撮影日時: 2017/08/09 13:00 ~ 13:05

ケア内容: 口腔ケア

スタッフレベル: 上級者

対象者: 高齢者 C(80代女性 K氏)

状況: 施設利用者 C に口腔ケアを行う、始めは研修生がケアを行っているが、途中から上級者のスタッフが交代してケアを行う。施設利用者 C は、発言するのが難しく、表情や仕草などで自分の感情を表現できる方である。

4.2 個々の場面对応に向けたケアゴールの拡張

ディスカッションを通じて、口腔ケアの場面に対して、ケアに対する考えが表出された。音楽をかけるというのが、口腔ケアに対しての一部のゴールとしてあるが、他の場面にも多用にあり、ゴールの表現を豊かにする必要がある。そこで場面ごとの対応の仕方も含めた拡張を行った。拡張したケアゴールを図4に示す。

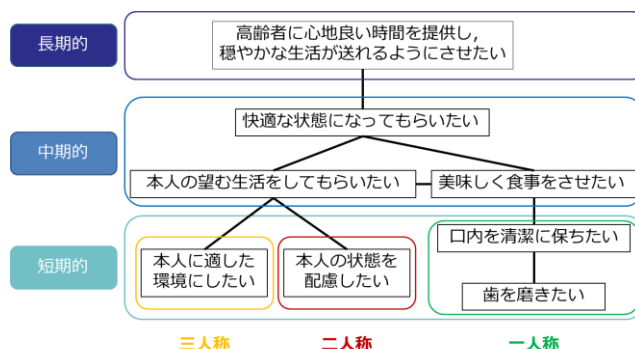


図4: 拡張したゴール表現

拡張したケアゴールは口腔ケアという場面でのゴール設計である。口腔ケアと言う一連の場面において、短期的や中期的、長期的なゴールを設定した。短期的なゴールに関しては一人ひとりのスタッフがどんな範囲で口腔ケアとその時の施設利用者や環境の状況を捉えていたかの可視化をし、個人ごとのスキルの評価を目指した。

4.3 ケアゴールを用いたケアにおける目標設定の評価検証

拡張したケアゴール構造に対してケーススタディで集めた各ケアスタッフの意見を照らし合わせる事で各ケアスタッフのケア時の目標設定の可視化を行った。ケアスタッフのレベル別のケア目標設定を表1と表2、表3に示す。

表1: 初級者のコメントからの目標設定推定

初級者3人	一人称視点	二人称視点	三人称視点
短期的視点	0	10	0
中期的視点	0	2	0
長期的視点	0	0	0

表 2：中級者のコメントからの目標設定推定

中級者 6 人	一人称視点	二人称視点	三人称視点
短期的視点	0	8	3
中期的視点	0	3	1
長期的視点	0	1	0

表 3：上級者のコメントからの目標設定推定

上級者 3 人	一人称視点	二人称視点	三人称視点
短期的視点	0	7	5
中期的視点	0	2	1
長期的視点	0	1	0

4.4 評価検証の考察

今回得られた結果から、初級者から中級者、上級者になるにつれて三人称視点のコメントや長期間を意識したコメントが増えていくことが分かった。特に三人称視点での意見が明確に増加しており、ケアのレベルが上がるにつれて、ケアを行う環境まで意識した考えができる事が分かり、ケアの目標設定を可視化することによってケアに対する考え方の共有に繋がる事が分かった。

今回の結果では、一人称視点による発言が見られなかった。これは、ケーススタディでの意見の聞き方が大きく関係している。今回のケーススタディでは、施設利用者の状態に着目した意見記述を行ってもらった。そのため二人称視点の意見が多くなった。このことから意見の聞き方を工夫することによって、特定の視点や期間を意識したコメントを引き出せる事がわかった。

また今回の分析では、ケアゴールとスタッフの意見の結びつけを分析者の主観的な判断に任せた。意見の中には、ケアゴールと結びつけるか難しい意見も幾つか存在した。そのためケアゴールと意見を結びつけ方にモデルを用意する必要がある。

5. おわりに

本稿では、その人らしい暮らしを支援する認知症ケア現場におけるノウハウやスキルの形式知化に向けて、ケアスタッフの考え方の表出を行った。また表出した考え方を元に、ゴール表現を用いてケアにおける目標設定を構造化した。設計したゴール表現を活用し、ケアスタッフの意見から目標設定を表出した。その結果から、ゴール表現を用いることでケアに対する考え方の共有に繋がることや今後のケアモデルや学習環境デザインに繋がる知見を得られた。

今後は今回得られたケアゴールや学習環境デザインの改良案を元に再構築を行っていき、スキルの異なるケアスタッフに適応した学びの促進を行っていく。

謝辞 現場でのデータ収集に多大な御協力をいただいた、ケアホーム西大井こうほうえんスタッフの皆様、並びに御入居者の皆様に深謝する。

参考文献

- [1] 島内節, 大賀英史, 山口亜幸子, 赤塚寮子, “利用者のケア効果からみた在宅ケア機関の評価方法：利用者条件の調整による標準値と機関比較,” 日本地域看護学会誌 vol3 pp.76-85, 2001
- [2] 中川健一, 杉原太郎, 小林等, 高塚亮三, 加藤直孝, 國藤進, “実社会指向アプローチによる認知症高齢者のための協調型介護支援システムの研究開発,” 情報処理学会論文誌 Vol. 49 pp2-10, 2008
- [3] 杉原太郎, 藤波努, 高塚亮三, “グループホームにおける認知症高齢者の見守りを支援するカメラシステム開発および導入に伴う問題,” 社会技術研究論文集 7 巻 pp.54-65, 2008
- [4] 真嶋由貴恵, “看護技術のスキル学習とノウハウ集約における映像活用,” 映像情報メディア学会誌 Vol66 No8 pp. 645-649, 2012.
- [5] 本田美和子, イブ・ジネスト, ロゼット・マレスコッティ, “ユマニチュード入門,” 医学書院, 2014.
- [6] Marvin Minsky, “A Framework for Representing,” Knowledge, 1974.
- [7] Marvin. Minsky, “THE EMOTION MACHINE,” SIMON & SCHUSTER PAPERBACKS, 2006.
- [8] 安西祐一郎, “情報共有によるインタラクションの理論,” 認知科学誌, 2017